

2009年8月30日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一 9章 15～27節

説教題：わたしは自分の民を見る

1 運がよいサウル？

ある時、キシユという人が飼っていた雌ロバが行方不明になります。その雌ロバを、息子のサウルに探しに行かせます。ところが、何日もかけて心当たりの所をあちこちと探すのですが、見つかりません。このままだと父親が心配するだろうということで、帰りかけようとなりました。そのとき、同行していた若者がサウルに言いました。「待ってください。この町に神の人サムエルがいます。今そこへ行ってみましょう。私たちの行くべき道を教えてくれるに違いありません。」

サウルも若い者も神の人と呼ばれるサムエルに会ったことはありません。どこにサムエルがいるのか皆目わからない。たまたま近くを通りかかった娘たちに聞いたなら居場所を教えてくださいました。言われたとおりに進んでいくと、ちょうど向こう側から出てきたサムエルと道でばったりと出会うことになる。この瞬間からサウルは、イスラエルの王となる人生を歩み始めていきます。

ビジネスやスポーツの世界で成功した人たちが、成功するためには何が必要かよく言います。人の何倍も努力することだ。能力も必要だ。そしてもうひとつ誰もが口をそろえて言うこと。最後に必要なのは、「運」だ。

片田舎に住んでいて、なにも経験のないサウルがいきなり大抜擢されて、出世していく。人の目から見れば、すばらしい強運の持ち主と言うことになります。では、聖書はこのことをどのように説明しているのでしょうか。ともに見てまいります。

2 神の原則、神のあわれみ

(1) 神を退けようとする願い

話は少しさかのぼります。イスラエルの長老たちは、かつてサムエルのことにやって来て言いました。「どうしても、私たちの上には王がいなくてはなりません。」長老たちがあることを言うのには、それなりの理由がありました。サムエルはもう年だ。もうそろそろ引退も間近い。サムエルの息子たちと言ったら、人々の見本となるどころか、悪いことばかりをしてこの国のリーダーにはふさわしくない。では次のリーダーをどうするか。切実な問題になってきていました。というのは、イスラエルは何度かペリシテ人との大きな戦いをしてきた。いつもペリシテ人との間に緊張した関係がありました。このままだれもリーダーに立つ者がいなければ、イスラエルはペリシテ人の手に落ちてしまう。だから王さまという強力なリーダーが必要だと言って譲りません。

長老たちは、最もらしい理由を掲げて、王さまを与えてくださいと願ってはいますが、しかし主の目からご覧になったとき、大きな問題を抱えておりました。

イスラエルがかつてエジプトから脱出するとき、神は先頭に立たれてイスラエルを導かれた。それ以来、イスラエルは神の御手によって治められてきたのです。ところが長老たちは、そのようにしてくださっている神を退け、人間の王さまを立てようとする。神は言われます。「イスラエルはエジプト脱出の時以来いつも神を捨て、神に逆らい続けてき

た。」今に始まった罪ではない。これまで何度も繰り返されてきた罪なのです。

普通であれば、神のみこころに背くような願いは叶えられるはずがありません。ところが驚くべきことに、神は長老たちの言い分を聞いて王を与えるというのです。その王となる者こそサウルであると主はお語りになりました。

15、16節前半。「主は、サウルが来る前の日に、サムエルの耳を開いて仰せられた。「明日の今ごろ、私はひとりの人をベニヤミンの地からあなたのところに遣わす。あなたは彼に油をそそいで、わたしの民イスラエルの君主とせよ。」

(2) あなた方の心がかたくななので

それにしても、皆さんは疑問に思われませんか。長老たちは明らかに神に背くようなことを要求している。それなのに、神はそのことをとがめるところか、積極的に、長老たちの願いを聞き入れようとされる。

私たちは神に逆らうようなことを願ってもよいのでしょうか。あるいは神に逆らうようなことも、自由にやってもよいと言うことでしょうか。私たちが何をしようとも、神は目をつぶり、受け入れてくれる。そんな寛大な神なのだと言いたいのでしょうか。

このことを考えるために、マタイの福音書19章3節以降の所を開いてみます。このテーマは結婚と離婚のことなのですが、サムエル記のことを考えるために大切なヒントを与えてくれます。

あるときパリサイ人と呼ばれる者がやって来てイエスに質問しました。「離婚は律法にかなっているのでしょうか。」神の律法に従えば、離婚は許されるのかそれとも許され

ないのか。そういう質問です。イエスは創世記の御言葉を引用します。「『人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となると』とされている。だから人は、神が結び合わせたものを引き離してはいけません。」神のみこころによれば、本来離婚はありえないとまず原則を示されました。

パリサイ人がすかさず反論します。「モーセは離婚状を渡して妻を離別せよと書いてあるけれど、それはどうなのですか。矛盾ではないですか。」

イエスは明解に説明されました。「モーセは、あなた方の心がかたくななので、その妻を離別することをあなたがたに許したのです。」

神が定められた原則は絶対に変わることはありません。しかし一方で私たちの心がかたくなであって、神が定められた原則の通りに歩むことができないということも神は知っておられます。原則はきちんとあるけれども、一方私たちの弱さに合わせて、離婚もありうることを許して下さった。すべては神のあわれみの故なのだ、説明されました。

聖書を読んでいると、ときどき矛盾したような表現に出会ってどっちが本当なのかと迷うときがあります。聖書が矛盾しているわけではありません。神は私たちの心がどれほどにかたくなものであるのかを知っておられて、あえて譲歩して下さっている。例えば私たちが、罪を犯し、過ちを繰り返したとしても、神は時間をかけ、忍耐されて、私たちにできなくなっていることを知って下さって、あえて見逃して下さる。そのような神であると教えられます。

もし、神が忍耐される方でなかったらどうなっていたでしょう。罪を犯した瞬間、容赦なくさばく神であったなら、私たちはどう

なっていたでしょう。誰ひとり救われる者はいなかったはずです。誰ひとり生き延びることができなかつたはずです。

そうしますと今、私たちが、ここにこうして生かされていること。罪を犯し続けても、さばきを受けることなく、かえって必要なものが与えられて生かされている。これは大変な恵みの中に自分は生かされていたのだと気がつきます。

イエスがしてくださった説明から、なぜ神があえて長老たちの願いを聞き入れ、王さまを立てようとしてくださったのかが、理解できます。長老たちの願ったことが罪であることには何ら変わりありません。しかし、また神はイスラエルを慈しんでおられることも確かです。彼らが罪を繰り返したとしても、なお愛し続け、ご自分の所に戻ってくる日を待っておられる。かたくなな者を冷酷に切り捨てるお方ではありません。あえて忍耐されます。あえて、願いを聞き入れて行かれます。

だからと言って神のご計画が台無しになったものではありません。神のご計画は、私たちの愚かな行いを通してでも、たゆむことなくまっすぐにそして確実に進められていきます。

3 イスラエルの王

(1) 最上の料理で迎える

サムエルはサウルと同行した若い者を食事の席に招き、一番良い席に座らせます。その食事のことについて24節にこう書かれています。「料理人は、ももとその上の部分とを取り出し、それをサウルの前に置いた。そこでサムエルは言った。「あなたの前に置かれたのはとっておいたものです。お食べなさ

い。わたしが客を招いたからと民に言ってこの時のため、あなたに取っておいたのです。」

どの部分の肉がもっともおいしいのか私は詳しくわかりません。でも、サムエルが取っておくようにと命じた「ももとその上の部分」は、ここで出された料理の中でももっとも上等なものであったことは、すぐに想像できます。それもあらかじめ前日から特別に選り分けられていたとあります。

雌ロバ探しの旅で、思いがけなくサウルは宴会の席に呼ばれことになりました。そこで一番の上座に座らされ、最上の料理で迎えられていきました。どうしてサムエルはこのようにしてまで、サウルを特別に迎えるのでしょうか。やがてイスラエルの王さまになるのですから、サウルに敬意を表したということでしょうか。それにしても、サウルはまだ事の真相を聞かされていません。自分がどうしてこんな形で迎えられるのか、理解できずにとまどったままです。また、この宴会の席に連なっている人たちも上座に座っている男がやがてイスラエルの王さまになっていくことを知らされていません。すべてを知っているのは、この宴会の席でサムエルただひとりだけです。

(2) 神の民を支配する王

どうして、サムエルがこのようにしてサウルを迎えるのか。そのことを考えるヒントが、主語自身が語っておられる御言葉に示されています。17節です。「ここに、わたしがあなたに話した者がいる。この者がわたしの民を支配するのだ。」

イスラエルの王は、神から神の民をゆだねられた者であり、また支配する者だと言われ

ています。ここで二つのことが言えます。

まず消極的な面です。例え王であっても最終的な主権は神にあるということです。ですから、王となる者は、自分が王であるからと言って自分の思いのままに政策を進めることは許されません。王ではあるけれど、いつも神の主権を認めることが求められます。

そしてもう一つ積極的な面です。イスラエルの王は神が遣わした者です。神から全権がゆだねられて、神に代わってイスラエルを支配する。それが王の役割です。王は神の代理であるというならば、私たちはやはりそれにふさわしい敬意を現すべきです。

サムエルは、神の主権を見えています。目の前に座っているのは、まだ何も知らされていない片田舎の若者なのですが、彼が神から大切な任務をゆだねられた者として王に立てられていくことを、真剣に受けとめています。サムエルは最上の物をより分け準備して、王となる者を敬意を持って迎えてまいります。

またサムエルの振る舞いからこうも言うことができる。イスラエルの王とは、最上の物をもって迎えられるべき方である。

(3) やがて来られる真の王

このように神は、サウルを遣わし、彼をイスラエルの初代の王として立てていきます。しかしそれで終わりではない。神のみこころはもっと先の所にあります。サウルという人間の王を越えて、やがて真の王となられる方を与えようとされます。その王とは誰であるのか。

ヨハネの福音書18章33節でそのことが明らかにされています、イエス・キリストが逮捕され、ポンテオ・ピラトに尋問される場面があります。ピラトは尋ねます。「あなたは

ユダヤ人の王ですか。」イエスは答えられました。「わたしが王であることは、あなたの言うとおりで。」

サムエルは、神がやがて本当の王さまを遣わしてくださることを知っていて、待ち望んでいます。彼は自分の目では見ることはできませんでした。でも、やがて遣わされてこられる救い主キリストを迎えるかのように、サムエルはサウルを迎えてまいります。

サムエルの信じたとおりに、やがて、父なる神はご自分のひとり子をイスラエルの王として遣わしてくださいました。神のひとり子は、父なる神から全権をゆだねられてまいりました。私たちの叫びを聞かれ、私たちに目を留めてくださって、約束を忘れることなく、二千年前に来てくださいました。

しかし、人々はこの方をどのように迎えたか。王である方にふさわしく、宴会の上座に座らせて迎えたのか。いいえ、この方は馬小屋でお生まれになりました。

また、真の王である方を迎えるとき、特別に選り分けられた料理をふるまって迎えたのか。いいえ、むしろこの方が十字架で死なれ、ご自分のからだを私たちの罪のなだめの供え物としてささげてくださいました。

心のかたくななものの住む罪の世に来てくださって、罪人に仕えていかれました。この方はご自分の国の王であられたのに、父なる神の主権に従い続け、父なる神の御旨を果たすことだけに心を砕いていかれました。

神は言われます。「民の叫びがわたしに届いたので、わたしは自分の民を見たからだ。」

私たちを見捨てるどころか、私たちのことを自分の民と言ってくださる。自分の民に目を留め気にかけてくださっている。そのよう

にして私たちの願いを聞き入れ、ご自分のひとり子を遣わし、私たちに与えてくださいました。

サウルが強運の持ち主であったので、王になることができたというような出世物語では決してありません。

サウルのことを通して、改めてイエス・キリストが私たちの遣わされてきたことの恵みを思い起こします。どれほど、神がわたしに対して譲歩され、忍耐されていたのか。そして私たちはこの方をどのようにして迎えた者だったのか、もう一度ふり返り、そして神の愛と恵みに感謝したいと願わされます。